研究ノート 船葬墳墓地サトン・フー(Sutton Hoo)をめぐる小論

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2021-04-20
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 原, 征明
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24531

研究ノート

船葬墳墓地サトン・フー（Sutton Hoo）をめぐる小論*

原　　征　明

1. はじめに
2. 周辺の立地と発掘経緯
3. 出土品とその特徴
4. 結びにかえて ―― 船葬墳墓の人物および墳墓地全体の解釈

1. はしがき

本稿は，筆者が訪れる機会を得たイギリス早期アングロ・サクソン時代の船葬墓（ship burial）サトン・フー（Sutton Hoo）遺跡の概観を扱うものである。因みに，上述の場所を訪れる直接の契機となったのは，かつて20年程前に筆者がロンドン大学客員研究員として滞在した際，良き隣人関係にあったプレステッド夫妻（Mr & Mrs Plested）が近年サフォーク州ウッドブリッジ（Woodbridge）に住居を移され，その場所が偶然にも上述の遺跡にきわめて近いので機会があったら是非訪ねるように，と何度か知らせを受けていたからである。

サフォーク州ウッドブリッジは首都ロンドンのリバプール駅（Liverpool Sta.）から列車で北東へ約2時間程のDeben河に沿ったところである。近年ここはその立地条件を生かしたヨット・ハーバーとしても知ら

* 本稿は平成17年度文部科学省「教育・学習方法等改善支援経費」の資料収集にもとづく研究成果の一部である。

れ，更にこのサトン・フー墳墓遺跡がナショナル・トラスト（National Trust）の一つに加えられたこともあって地方の小都市ながら多くのイギリス人をひきつけているようである。といっても，ここでは日本人などほとんど見かけることはない，というのが遺跡に関わる展示施設で働く地元の人がわたくしに示した率直な反応であった。

わが国でもこの船葬墳墓地のことを扱った筆者未見の先行研究があるいはすでに存在するかもしれないが，上述の事情で昨年夏(2005年8月)に現地を訪れて一見することができた遺跡について，記憶の確かなうちにいささか新しい考察をくわえておくことは，あながち無意味なことではないだろう。

2. 周辺の立地と発掘経緯

ウッドブリッジに向かうルートは，アングロ・サクソン人到来前のローマン・ブリテン時代に張り巡らされていた「軍道」（Roman road）沿いにあり，その途上のエセックス州にコルチェスター(Colchester)がある。この場所はColne河沿いに立地しローマン・ブリテン時代における最初の植民地（*Colonia Camulodunum*）としての起源をもち，3世紀頃にはLondinium（＝London），Caister-on-Sea，Rochester，Richborough，Lympneなどと共に防壁で固められた都市集落を形成していたという歴史がある。

また，ローマ軍の退却後に到来したサクソン人によって5世紀前半にはCanterbury，Caister-on-Norwichと共に要塞ないし定住地としてその継承性が認められる証拠も存在[1]するのである。加えて，ローマ人の撤退後も5世紀から7-8世紀にかけブリテンの東南部には交易その他を

通じて海を隔てたガリア地方やラインラントから大量のガラス器や陶器類が到来し，遠くビザンツ・地中海沿岸の陶器など大陸起源の品物が出土したことが古くから考古学者たち[2]によって指摘されていた。後述するように，この小論における考察対象サトン・フー船葬墳墓遺跡からの出土品にそうしたものと思われるものが含まれるのはこの理由によるのである。

さて，サトン・フー遺跡はイングランドのサフォーク州を流れるDeben河入り江のそばのヒース段丘（heath）に位置し，その対岸がウッドブリッジ（Woodbridge）である。1930年代後半の頃，この遺跡群がある土地一帯は亡き夫の遺産を受け継いだプレティ婦人（Edith May Pretty）なる人物の広大な所領をなしていて，その当時からここにある複数の土饅頭（＝墳墓）の存在が知られていた。そこで同夫人は1937年の夏イプスヴィッチ博物館（Ipswich Corporation Museum）に調査を依頼，同館の学芸員メイナード（Guy Maynard）による指揮のもとで所属の考古学者ブラウン（Basil Brown）の手に発掘が委ねられることになった[3]。こうして1937年の夏サトン・フーにある三つの土饅頭（Mound 2,

---

(1) Cf. Stuart Rossiter (ed.), *The Blue Guide England* (Ernest Benn Ltd., London, 1965), p. 433; Stephen Johnson, *Later Roman Britain* (Routledge & Kegan Paul, 1980), pp. 2, 33, 72, 138, esp., 140-141.

(2) Cf. N. Åberg, *The Anglo-Saxons in England during the Early Centuries after Invation* (Uppusala, 1926), pp. 90ff.; E.T. Leeds, *Early Anglo-Saxon Art and Archaeology* (Oxford, 1936), pp. 46ff; C.F.C. Hawkes, 'The Jutes of Kent' in: D.B. Hard (ed.), *Dark-Age Britain* (London, 1956), pp. 112ff. もっともオーベルイ（Åberg）は大陸起源の出土品を特に6世紀以降における交易関係の所産とするのに対して，リーズ（Leeds）はフランク族のブリテン東南部への移動（渡来）に起因する両者の関係とみた。リーズ（Leeds）の場合にはケントに定着したのはフランク人の同族であり，交易のみならずその後の接触関係の増大にも起因するというのである。

(3) 彼はStanton Chairのローマン・ヴィラ（Roman Villa）を含むいくつかの重要な場所の発掘を既に手がけていたこの地方の知識人でもある。

Fig. 1　One of the Sutton Hoo burial mounds
（筆者　撮影）

3, 4 —Figure 2 を参照—）が開けられるのである[4]。そこには以前盗掘された痕跡もあったが，二基の墳墓は火葬墓で他の一基は鉄製の鋲で締められた船墓そのものであることが検証された。その他いくつかの貴金属製装飾品，ガーネット装飾品，ガラス製品，鉄製武器の欠片なども出土し，これらが異教時代の慣習をのこすアングロ・サクソン人の極めて重要な人物に関わる埋葬墓であることがはじめて明らかになった。

詳細は後述するとして，埋葬様式そのものも通例の場合と異なっていたことに特徴がある。それは火葬（cremation）そのものがアングロ・サクソン人，スカンジナヴィア人の社会ではキリスト教の到来前の時代に認められるとはいえ，キリスト教化と共に武器類・装身具類・硬貨など

(4) Cf. Catherine Hills, *Blood of the British* (1986), pp. 167-171.; Michael Wood, *In Search of The Dark Ages* (BBC, 1981), pp. 61ff. chap 3.

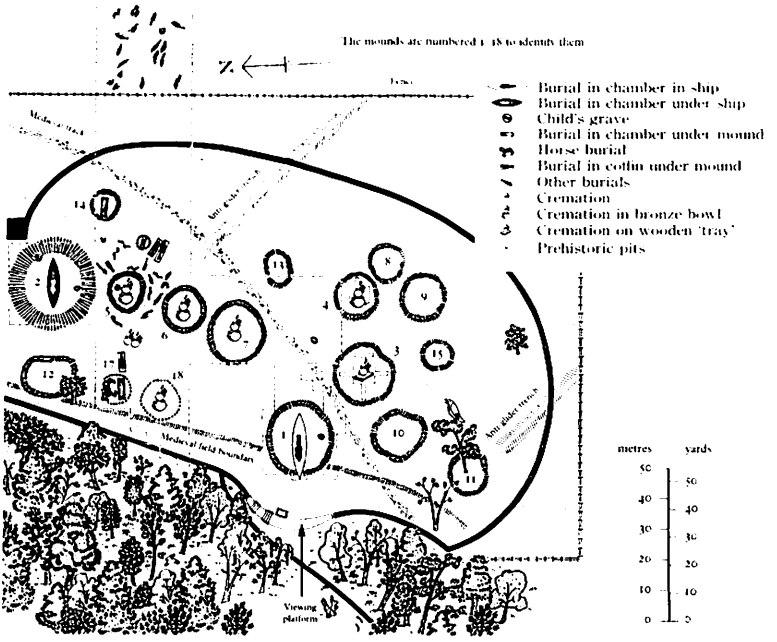

Fig. 2　Map of Sutton Hoo Burial site from Steven J. Plunkett & David Lucas, *Sutton Hoo* (National Trust, 2003), back cover (reduced)

が副葬品として遺体とともに埋葬されることはなくなった[5]とみられるからである。そうすると，イングランドでキリスト教化が進行する中にあるとはいえ，この7世紀のサトン・フー船葬墳墓は一体異教時代の人物のものなのか，そうでないのか，また単なるカラ墓なのかなどいくつかの興味ある問題の解決をわれわれにせまることになる。

さて，上述の土地所有者プリティ婦人は1942年に没するがそれに先

(5) H.R. Loyn (ed.) *The Middle Ages : A Concise Encyclopedia* (Thames & Hudson, 1989), A. Meaney, *A Gazetteer of Early Anglo-Saxon Burial Sites* (G. Allen & Unwin, 1964), pp. 13–21.; A.C. Evans, *The Sutton Hoo ship burial* (1986).

立ってこの遺跡とそこからの出土品を国に帰属させる手続がとられていた。それゆえ第二次大戦後，大英博物館(the British Museum)のブルース・ミッドフォード（Rupert Bruce-Mitford）氏らの手で従前の出土品などに検討が加えられる機会は確かにあった。けれども本格的な発掘・調査が開始されたのは，20 世紀も後半，即ち 1980 年代から 1990 年にかけ "Sutton Hoo Research Trust" とヨーク（York）大学の合同による長期の調査プロジェクトが組織されるようになってからのことである。また 1983 年以来，大英博物館ならびにロンドン考古学協会(the Society of Antiquaries of London）の資金援助も加わった。こうして発掘調査はその後約 8 年間にわたり現在ヨーク大学所属のマーチン・カーヴァ(Martin Carver）氏の手に委ねられ，埋葬遺跡全体にわたる検証が加えられてきている[6]のである。

3.　出土品とその特徴

サトン・フーの発掘は 1937 年に着手された。その 2 年後の 1939 年に調査員たちは墳丘墓地で楕円形墳墓の中心部に「空洞」のあるひとつに出くわした。それがなぜ楕円形であったのかといえば，なかに一隻の船が埋められていたからである。中心部の空洞は船の中央部に当たる「木製墓室」が腐朽したことによるものだが，腐った木材が砂地に残した痕跡からあとで船の復元も行われた。その大きさは全長が推定 27 メートルもあり，大陸ユトランド半島南部のニイダム（Nydam）で発見された船と類似した重ね板作りのものであった。即ち，ニイダム船も両側面に 5 枚

---

[6]　Cf. Steven J. Plunkett & David Lucas, *Sutton Hoo* (National Trust, 2003), pp. 7-8.

の条板を張ったもので，それらの板は互いに大きな鉄鋲で固定されていた。サトン・フー出土のものは左舷の上端に櫂受けのあとが残っているところから櫂船であるが，それに加えて切妻造りの墓室跡があり，そこに従前のイギリスでかつて類例を見ないほど豊かで豪華な品々が副葬品として納められていたのである。[Mound 1]

その墓室からの出土品であるが，まず第1に「日常生活用具および武器」として，多数の鎖細工（chain work），鉄張りの木製の桶数個，3個の大鍋，陶器製の瓶一個，槍と投槍（spears and angons）数本，鉄製柄つき戦闘斧（iron-hafted battle axe）一個，西洋野牛の角に象嵌を施した酒杯二個，楽器の断片—復元の結果で竪琴（harp, lyre）—，皇帝アナスタシウス1世(491-518)の刻印があるビザンツ起源の銀製円形大皿，円形で中央部に女性頭部像が浮き彫りされた銀製の大皿，エナメル細工を施した3個で一組の青銅製吊り下げ椀（hanging bowl），そしてギリシャ文字でサウロとパウロの名前が彫られている一対のスプーンがあった。この最後のものが極めて重要であるのは，かつて大英博物館に所属し，英国考古学協会のディレクターでもあった考古学者ウィルソン（David M. Wilson）氏の指摘によれば，使徒パウロの改宗がここに暗喩されているのはある重要な人物が改宗したか，または洗礼を受けたことを象徴している[7]，と見なされたからである。第2のものは日常生活用具には属さない「個人用装飾品」である。それは柄に宝石がちりばめられた剣と鞘，鳥や竜の模様がある楯，装飾が施された兜，黒金（硫化銀）で象眼がほどこされた動物文様がある黄金製のバックル，飾り板と飾り鋲

---

[7] Cf. David. M. Wilson, *The Anglo-Saxons* (Frederic A. Praeger, 1962), p. 17 & P. 47ff.; The Plates., Do, *The Anglo-Saxons* (Penguin Books, 1966), p. 41 & p. 97 ff., & pp. 165 ff., Note on the Plates.

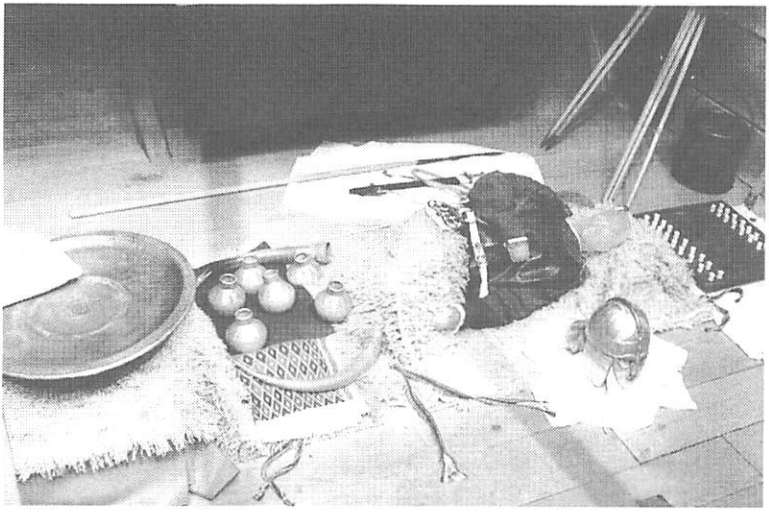

Fig. 3　The burial chamber (reconstructed)
（筆者　撮影）

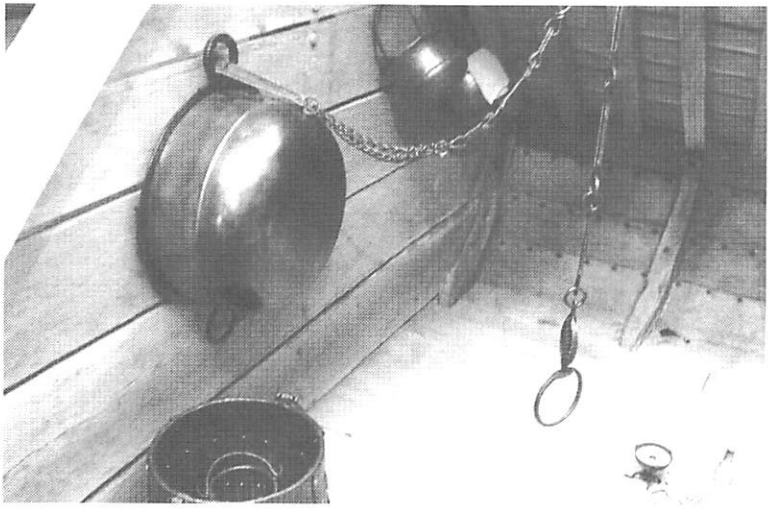

Fig. 4　The burial chamber (reconstructed)
（筆者　撮影）

にガーネットやモザイク・ガラスで象眼され動物が彫りこまれるなど多色彩色技術で仕上げられた一対の肩章用留め金などサトン・フー船葬墳墓の墓屋で発見された最高の宝飾出土品なのである。因みに兜のデザインはスカンジナヴィア地方の手工業者の影響を受けたものか，あるいはそうした地域との交易によるものと考えられることは特筆すべきことであるといえよう。

第3の出土品として「王権を象徴するもの」が含まれていた。

即ちそれはまず190センチ弱の鉄棒の上部に青銅をふいた鉄製牡鹿をいただく輪が装着されたトゥーファ（*Tufa*）という型の軍旗（standard）である。また，四角の断面をなす長さ約61センチの砥石（whetstone）の出土が興味深い。これは実際に刃物を研ぐ目的で作られたものでなく，両端部が細くて四面にそれぞれ人の顔が彫られていた。しかも先端部分が赤く塗られた輪型の握りをなし青銅の枠でおおわれていた。上述の考古学者ウィルソンによると，人間の顔が彫られた砥石の出土例はケルト地域で若干あるにせよ，アングロ・サクソン人の墓からの出土はまず見られないものであった。かくしてそれは「王権の表象」としての笏（scepter）か，あるいは北欧世界の鍛冶師を取り巻く神性と神秘を象徴するものである，と見なされている[8]。

サトン・フー船葬墓からの出土品として，経済史家の関心を引く第4のものに「貨幣」がある。ここからは37枚の貨幣，未加工品が三枚（three blanks），それに二個の小鋳塊（small ingots）が出土し，その全てが金

---

[8] The idea that it is a scepter has received general acceptance: in the words of Sir Thomas Kendrick, 'Nothing like this monstrous stone exists anywhere else. It is a unique, savage thing: and inexplicable, except perhaps as a symbol proper to the king himself and the divinity and mystery which surrounded the smith and his tools in the northern world'. cf. D.M. Wilson (1962), *op. cit.*, pp. 51-52; Ditto, (1966) *op. cit.*, pp. 45-46.

であった。金貨はトレミセス貨幣（tremisses）[9] 即ちローマ帝国の標準金貨ソリドゥス（solidus）の三分の一貨幣であった。古銭史学者によって7世紀中葉（650-660 A.D.）頃のものと見なされている。そのほか同墓からは数多くのガーネット細工の小型宝飾品が出土しているが，それらは他のいくつかの出土品も含め大陸フランク，スウェーデン，イングランドのケント地方，ノーサンブリア，あるいはケルト地域などの影響を受けサトン・フーがある当地イースト・アングリアの工房で製造されたか，それとも交易によって到来したものなのであった。

4. 結びにかえて —— 船葬墳墓の人物および墳墓地全体の解釈

これまでの考察の中心は，おもに船葬墓（Fig. 2 の Mound 1）についてのものであるが，残された問題はここに埋葬された人物が一体誰なのか，ということである。この点に関して当初，墓室に遺骸そのものを直接発見できなかった D.M. ウィルソンによる研究段階では偉大な人物にささげられた「カラ墓」つまり記念塚と考えざるを得ない，というのがその判断なのであった。しかしその後に行われた大英博物館の調査員たちによる再調査と土壌の化学的分析などの結果，同調査チームは遺体そのものが実際そこに埋葬されていた可能性が十分あるという結論に到達した。最終的には1979年のことである。もちろん，そこにいたるまでにも論争はあったが，船が埋められていた場所の強い酸性砂地で遺骸が消失させられたと考えられること，しかし包括的な化学的検査の結果，土壌が高濃度の燐酸塩をおびていたことも明らかになった。何よりも重要

---

[9] コンスタンティヌス帝によって作られた東ローマ帝国の貨幣であるが，ここではそれを模倣したメロヴィング期フランク王国のものである。

であったのは，従前（1939年）の発掘者らによる調査記録そのものの再吟味が実施された際，棺［に装着されていたと思われる］鉄製の付属品（coffin fittings）の存在自体が，サトン・フーをめぐるその後の議論の中で実はぬけ落ちていたことが判明したことである。その金属片の位置こそが遺骸をかこむ副葬品を入れた木製長方形棺の輪郭とほぼ一致する[10]と後年断定されたのである。しからばその人物とは一体誰なのか。

この問題については早くから大方の一致した意見をみている。即ち，出土したその副葬品に当時のヨーロッパで作られた最高の豪華な宝石細工や遠くは地中海からもたらされたものまでも加えることができた人物，そして笏（scepter）についての叙述からも明らかなように，7世紀の初頭におけるイースト・アングリア地方の有力な覇王レドワルド（Rædwald, d.624-5）をおいて他にない[11]ということなのである。彼こそは当時王家のなかで最も重要でしかも富裕な半異教的人物なのであった。レドワルドの統治はケント王エセルベルフト（Æthelberht, d. c. 616），およびノーサンブリア王エドウィン（Edwin, d. 633）のそれと時代的に重なる。そして彼は恐らく604年頃ケントで洗礼を受けエセルベルフトの支配下で次の地位にあり人々に対する軍事的リーダーシップを容認される状況にあったわけである。またそのことによりベーダ（Venerable Bede, 672-735）の『アングル人の教会史』（*Historia ecclesiastica gentis Anglorum*）の中ではエセルベルフトに次ぐ覇王（'*Bretwalda*'）としてそのリストに登場する人物になったと考えられている。ただし，レ

---

(10) この部分は筆者の専門とするところではないが興味深い。Cf. Michael Wood, *In search of The Dark Ages* (B.B.C, 1981), pp. 66-67.

(11) 当初は，出土した貨幣により Rædwald 以外にも Eorpwald (d.627/8or632/3)，Sigebehrt および Ecgric（両者とも640年頃に殺害された），Anna (d. 654)，そして Athelhere (d.655) らの人物が検討されている。例えば Cf. D.M. Wilson (1962), *op. cit.*, pp. 52-53.; Ditto, (1966), *op. cit.*, pp. 46-47.

ドワルドは一つの寺院にキリスト教と異教の祭壇の両方を設置したと後に評せられた人物でもある（*HE* ii. 15)。ともあれ，彼は620年頃から広くその実力を有する王になるわけで，他方スカンジナヴィア地方における船葬墳墓の祭式が出現する時期も彼の統治と重なった[12]のである。

サトン・フー遺跡は総じて7世紀ころその勢力を拡大しつつあったイースト・アングリアの王家に関わるものであろうことは明らかである。更に，Fig. 2によれば前述の王レドワルドのものと考えられる船葬墓(Mound 1)以外にも人間が埋葬されていた形跡がある比較的大型の船葬墓(Mound 2)，そしてやや小型の墳墓(Mound 14)を含め，あわせて18基あることが分かる。また，最近の調査ではMound 17からは被葬者の遺骸とともに，用いられていたであろう馬と飾りのついた馬具も副葬品として出土した。恐らく王家に関わる戦士のものと思われる。土饅頭の数も約21基に達しているとさえいわれるが，本稿の叙述はその全てを扱うものではない。ところでこの場所は，とりわけ1984年以来の調査で埋葬の形や出土品のいずれをとっても広範な多様性を持っている，いわば「複合遺跡」であることが判明した。なかでも注目されるべきこととして，この同じ場所にレドワルドの時代を含む10世紀あたりの時代にかけ，斬首や絞首刑により処刑された者たちの遺骸が埋められていた[13]ということなのである。[Fig. 2の上部およびMound 5の周辺を参照]

それはなぜなのか。最後にこのことについていささか言及して，この

---

(12) Cf. Michael Lapidge & others (ed.), *The Blackwell Encyclopaedia of Anglo-Saxon England* (B. Blackwell, 1999), p. 385.; D.J.V. Fisher, *The Anglo-Saxon Age* c.400 1042 (Longman, 1973), pp 113 115., Steven Bassett (ed.), *The Origins of Anglo-Saxon Kingdoms* (Leicester U.P., 1989), p. 129ff.; Simon Keynes, 'Rædwald the Bretwalda', in *Voyage to the Other World : the Legacy of Sutton Hoo*, (ed.) by C.B. Kendall & P.S. Wells (Minneapolis, MN, 1992), pp. 103-123.

(13) S.J. Plunkett & D. Lucas, *op. cit.*, p. 28.

小論を終えることにしたい。アングロ・サクソン時代には人間の生命やその価値が，その帰属する社会的地位によって測られたこと。しかもそれに代わる人命金（wergild）の支払いが実際に行われていたことも分かっている。加えて，7世紀頃からは王たちにより文字で書かれた法典が編纂され，公道徳や義務が定められ，社会規律や正義について旧来の観念が補強されるようになっていた。ところが上述のレドワルド王の場合，文字によらないで約束事を実行することの名誉をむしろ好んだという。これに加えて，サトン・フー遺跡のある場所が，一方ではデヴェン河（Deben）を往来する船のルート沿いに位置し，他方この時代の陸路（＝Medieval track）とも交錯するところに位置していた［Fig. 2 を参照］ということになるわけであるから，ここを拠点に王権がその支配力を強化・拡張していく場合，人々にその実力の程を誇示する格好な象徴的立地をなしていて，ここがそれを体現する手段として用いられた「処刑場」でもあった，ということになるだろう。やがてヴァイキング時代が到来すると，イースト・アングリア王国の人々にとって彼らが最も恐れられた「外敵」となったことは言うまでもない。後年デヴェン河の渡河地点に絞首門（gallows）が再び設けられるようになった[14]と指摘されているのは，そのことを意味するものではないだろうか。

---

(14) *ibid.*